

世の中の入り口

大森 海太

今から五十数年前、化学メーカーに就職した私は半年の実習のあと、岡山県にある石油化学工場の業務課に配属された。当時の業務課は原料、製品のタンクヤードを所管しており、事務所と計器室が隣り合わせだった。

私の与えられた朝イチの仕事は在庫の計算だ。計器室に行って担当製品の朝五時半の在庫容量とタンク温度を台帳に転記、次に一台しかない電動計算機のところまで順番待ち、番が回ってきたら比重表でその温度の比重を検索し、容量と掛け合わせて在庫重量を算出する。これと前日の出荷量の合計を足し合わせ、前々日の在庫量を引いたものがその製品の前日の生産量（正）となり、製造現場に連絡する。

これが終わると当日の出荷（船、貨車、ローリー）について社内外との調整、出荷後の数量確定、送り状の作成等々。デスクワーク半分、あとの半分はヘルメットをかぶってタンクヤードや製造現場をまわったり、船積みが終わると船内で数量協定書を取り交わしたりの日々だった。

苦手だったのはソロバン。高卒スタッフがバチバチこなしているのを横目に、おぼつかない指で苦戦する。現場のベテランスタッフは一メートルもある計算尺をりゅうりゅうとじぎいて「これで何でもできるばい」と自慢顔。

大学時代は口々に勉強もしないくせに生意気なことを言ったりしていたが、社会に出てみるとまったく違う大人の世界が待っていた。面食らうこともたくさんあったが、でも私にとっては白紙にインクが浸み込むように、新鮮な気持でいっぱい毎日常だった。振り返ってみればこれが私にとっての「世の中の入り口」だったのだ。

しかし今日では私が体験してきた様々の作業などはコンピューターで一瞬のうちに処理されてしまうだろう。昨今の新入社員は一日中画面を前に、仮想空間のアバターとやらと向かい合いながら「世の中の入り口」を経験するのだろうか。そんなことでもいいのだろうか？ 「世の中の出口」にたたずむ老人は余計なことを心配している。